論　説

オーレル・スタイン・ペーパーズから見る ゼキ・ヴェリディ・トガンのトルコ史研究と歴史観

――「第 1 回トルコ歴史学大会」から「トルコ全史」へ (1932-1933 年)[1]――

小野　亮介

はじめに

ゼキ・ヴェリディ・トガン (1890–1970 年)[2] は 20 世紀を代表するトルコ学者として、またロシア革命期における民族運動の指導者として知られている。とくに、『現代のトルキスタンとその近代史』(初版 1928 年)、『回想録』(初版 1969 年)[Togan 1999a]、『バシキール人の歴史』（バシキール語 1994 年、トルコ語 2003 年）などの著作は、革命前後におけるロシア・ムスリムの政治動向を追う上で必要不可欠な資料である。

研究者としてかねてより定評のあったトガンは、ペレストロイカおよびソ連崩壊を経て、祖国バシコルトスタンを中心に旧ソ連圏でも民族主義者としての再評価が進んだ。近年では毎年のようにトガンに関する研究が世界各地で公にされているが、そのいっぽうで行き過ぎた再評価を懸念する声もある。Исхаков [2003: 147] は、「ヴァリードフ [トガン] の歴史的肖像は相変わらず神話化され、『修正され』、結局は公式化されている」と批判し、利己的で同志を顧みない野心家としての側面を暴き出した。そして、「政治家として、また東洋学者として、そしてとくに革命及び内戦の歴史家としてのヴァリードフの役割は区別するべきである」[Исхаков 2003: 152] と結論づけ、研究者としての側面とは別に政治家としてのそれを批判的に検討すべきだとした。

たしかに両者の無分別な混同はトガンの正当な評価を不可能にするかもしれないが、それでもやはり彼の持つ二つの側面を分かちえないと筆者は考える。筆者の最大の関心は亡命以降におけるトガンの民族主義思想の形成にあるが、政治家としてのみ、あるいは研究者としてのみトガンを扱うことは解明を困難なものとする。1923 年に中央アジアを去った後に限

---

(1) 本稿は松下幸之助記念財団 2010 年度「松下幸之助国際スカラシップ」による成果の一部であり、日本中東学会第 29 回年次大会 (2013 年 5 月・大阪大学) での発表に大幅な修正を加えたものである。

(2) ゼキ・ヴェリディがトガン姓を名乗るのは 1938 年以降のことだが、本稿では便宜上トガンと表記する。

って彼の思想的変遷を追うと、1) アヤズ・イスハキー (1878–1954 年)、サドリ・マクスーディー (1879–1957 年) らイディル（ヴォルガ）・ウラル派との対立、2) ロシア革命から亡命初期にかけては同志だったが、そのご袂を分かったムスタファ・チョカイ (1890–1941 年) らトルキスタン人亡命者との対立、3) 本稿で論じる 1932 年の「第 1 回トルコ歴史学大会」、4) クーデター未遂などの容疑で逮捕され、不当裁判にかけられた「人種主義・トゥラン主義裁判事件」(1944–1945 年)[3] をターニング・ポイントとして挙げることができる。自身に向けられた批判や嫌疑への反論、支援者への状況報告は、公言されることのない内容が多いが、あふれ出すかのように自身の思想的特徴を述べている点では、平時の著作以上に有益と考えられる。前二者がロシア革命に端を発する亡命者間の対立を主題とするいっぽう、後二者はトルコ共和国の政策、イデオロギーなどとトガンがどう対峙したかという問題に結びつく。とくに、本稿で検討する 3) はトルコ学・史学史の要素を多く含み、政治家としてのトガンの側面から検討するのみでは不十分である。

また、[Togan 1999a] の副題や 4) での弁明書のように、トガンは自らの民族的存在をしばしば「東トルコ人 Doğu Türkleri」と呼称している。字面からは曖昧な定義に見えるこの概念の形成には、トガンの政治生命ももちろんだが、本稿で検討するような彼の学術的関心や歴史観が大きく影響している。このように、政治家と研究者という二つの側面は車の両輪のようなものであり、後者の側からも民族主義思想の形成に接近してゆかねばならない。

そこで本稿は、オックスフォード大学ボードリアン図書館が所蔵する資料オーレル・スタイン・ペーパーズ（概要については第 2 章 (2) で詳述）に依拠し、1932–1933 年におけるトルコ史研究者としてのトガンの側面に焦点を宛てることを目的としたい。トルコ共和国では 1930 年代初頭に公定歴史学として「トルコ史テーゼ」が整備され、1932 年に「第 1 回トルコ歴史学大会」が開催された（両者については次節以降で詳述）。本稿ではトガンがこれらにいかに対峙し、また彼自身はそこから離れてどのような問題に関心を持っていたか、そして当時の状況は彼の研究生命のなかにどう位置づけられるかを史学史的観点も交え考察してゆく。

---

(3) 右派の若者たちのデモをきっかけに、トガンやのちにトルコを代表する民族主義者となる N. アトスズ (1905–1975 年) らがクーデター、トゥラン国家の樹立などの容疑で逮捕された冤罪事件。その背景には、ソ連を刺激しないよう民族主義者らを抑え込もうとしたアンカラ政府の思惑があったとされる。トガンも懲役刑を宣告されたが、第二次世界大戦が終結すると被告全員が無罪となった。

第 1 章「テーゼ」の成立と「大会」でのトガン

(1)「第 1 回トルコ歴史学大会」までのトガン

まず 1932 年の「第 1 回トルコ歴史学大会」に至るまでのトガンの経歴を、『回想録』[Togan 1999a] や最も定評ある伝記 [Baykara 1989]、トルキスタン亡命知識人に関する包括的な研究 [Andican 2003] などを手がかりに追ってみたい。処女作『トルコ人とタタール人の歴史』(1912 年) で頭角を現し、東洋学者としての道を順調に歩んでいたトガンは、二月革命ののち本格的に政治活動へ身を投じた。第 1 回全ロシア・ムスリム大会 (1917 年 5 月) など様々な大会において彼が主張したのは、民族別の自治共和国を前提とする連邦制国家構想であった。他方タタール人知識人たちは、領土を超越した文化的自治を追求すべきという立場をとった。イスハキーやマクスーディーらイディル・ウラル派との対立は、この「領域的自治（連邦主義）」と「文化的自治（統一主義）」を巡る議論に端を発している。

十月革命後に成立したバシコルトスタン自治政府で首班を務めたトガンは、1919 年にボリシェビキと軍事協定を結ぶが、協力関係は 1 年余りで破綻した。1920 年末にトルキスタンへと逃れ、翌年には民族主義者たちのプラットフォームとして「トルキスタン民族同盟 Türkistan Millî Birliği」(以下、TMB と表記) をブハラで秘密裏に結成している。そのご彼は反ソ・ゲリラ運動として知られるバスマチ運動に合流するが、やがてこの運動も失敗に終わり更なる亡命を余儀なくされた。途上のマシュハドでは、10 世紀にバグダードからヴォルガ河畔のブルガール王国に派遣されたイブン・ファドラーンによる『旅行記』の唯一現存する写本（Riḍawīya, MS 5229）を発見している。そのごアフガニスタン、英領インドを経て、1923 年末にパリに至った。パリでの滞在は 2 カ月に過ぎなかったが、本稿で取り上げるイギリス人考古学者オーレル・スタイン (1862–1943 年) の知遇を得たのはこの時期のことである。1924 年にベルリンへ活動拠点を移したトガンは、TMB の委員長に再選出され政治活動を模索すると同時に、写本調査にも従事している。なお、イディル・ウラル派との対立はこのパリ・ベルリン期にも見られる。

1925 年にトガンはトルコ共和国への移住・帰化を果たす。1927 年にはダーリュルフュヌーン（現在のイスタンブル大学）のトルコ史教授に任命された。また TMB は同年、イスタンブルで機関誌『新トルキスタン』を創刊した。この雑誌の編集長を務めたトガンは、政治や時事問題の論文ではアンカラ政府を刺激しないよう筆名を使っているが、シャイバーニー・ハンの詩、トルキスタンという地域概念の歴史的変遷、沿ヴォルガ地域の文化などの文化史的な諸問題については実名で精力的に論文を発表している。

TMB や大学での活動と並行して、トガンはトルコ国内外の写本調査にも力を注いだ。トガンと双璧をなすトルコ学者として知られる F. キョプリュリュ (1890–1966 年) は、

[Köprülüzade 1926] でトガンの写本研究を高く評価している。この論評では、本稿で見てゆくビールーニーの諸作品の他にも、ザマフシャリー『ムカッディマト・アル＝アダブ』、カーシュガリー『テュルク諸語集成』など、論文や校訂出版を通じてトガンが深くかかわる作品が挙げられており、彼の後半生における研究の土台がトルコ移住直後にはすでに築かれていたことがわかる。

内紛のため 1929 年に TMB を追放されたトガンは、アトスズが主宰した『アトスズ雑誌』に合流する。トガンは同誌に寄稿した論文「トルコ叙事詩の分類」[Valîdî 1931a] で、自身の叙事詩観を読者に披露している。それによれば、叙事詩は歴史的事件以上に民族的な感情や世界像を反映するものであった。続けてトガンは、叙事詩には確固とした歴史的表象、描写が存在すると論じる。トルコ叙事詩の場合、オグズ・モンゴル的な伝統がそれに該当した [Valîdî 1931a: 4–5, 30]。そして、始祖の「灰色の狼」から始まり、トゥンガ・アルプ、カラ・ハン、オグズ・ハン、ボグラ・ハンとその末裔、デデ・コルクト、キョルオールといった賢者や勇者たち、チンギス・ハンとその一族、ティムール、エディゲらへと脈々と伝わる英雄を列挙した [Valîdî 1931a: 52–55]。つまりトガンは英雄の系譜に沿って、イスラム史や個別の王朝史の枠組みにとらわれない歴史観を提唱している。トルコ人の一体性と連続性を重視するこの歴史観は、すでにフランスの東洋学者 L. カウン (1841–1900 年) の『アジア史序説』(1896 年) によって定式化され、N. アースム (1861–1935 年) による紹介を通じて一度はトルコの知識人にも受け入れられた。しかしそのごは逆に、チンギス・ハンやティムールはアナトリアや南ロシアを荒廃に導いた破壊者として貶められたという。こうした状況のもとで、叙事詩の見直しはオスマン史に代わる歴史観を樹立するために必要な作業であった [Valîdî 1931a: 28–29]（トガンの叙事詩観は第 3 章 (2) でも述べる）。

このようにトルコ共和国への帰化以来、トガンは中央アジアの文化に関する幅広いテーマを扱い、トルコ史の構想を模索していたといえよう。これと真っ向から衝突したのがアンカラ政府による公定歴史学「トルコ史テーゼ」であった。

(2)「トルコ史テーゼ」と「第 1 回トルコ歴史学大会」

オスマン帝国の滅亡 (1922 年) とトルコ共和国の成立 (1923 年) によって、トルコ民族主義は領土拡張をも視野に入れる汎トルコ主義から一国ナショナリズムに大きく舵を切った。それまで様々な詩でトルコ人の理想的故地トゥランを称えたにもかかわらず、最晩年の『トルコ主義の諸原則』（1923 年）では、新生トルコ共和国のとるべき道としてアナトリア防衛に専念する「共和国トルコ主義 Türkiyecilik」を掲げたズィヤ・ギョカルプ (1876–1924 年) はその好例だろう [Landau 1995: 36–38]。にもかかわらず、言語や文化、歴史などの一体性に基づいた文化的汎トルコ主義は決して放棄されず、旧来のオスマン人に代わる国民意識の

創出を目指したアンカラ政府に取り込まれていった [Landau 1995: 77–79]。こうした背景のなか 1930 年代初頭に登場したのが「トルコ史テーゼ Türk Tarih Tezi」（以下、「テーゼ」と表記）である。

「テーゼ」自体については [Ersanlı 2003] を筆頭に様々な研究があり、日本では [永田 2004] が史学史や人種主義の観点からその成立背景を詳細に分析している。また、古代史や共和国史と比較すると中近世史部分は相対的に穏当であったと指摘する [小笠原 2011] のように、「テーゼ」を部分的に評価することも可能である。

永田 [2004: 107] によれば「テーゼ」は、水と緑にあふれる中央アジアの原住民であったトルコ人は、気候の乾燥化のため世界各地に移住し、行き着いた先々で古代の諸文明を打ち立てたという「極端に自民族中心の歴史観」と定義することができる。紙幅の都合上、歴史的背景の検討はこれらの先行研究に譲るとして、以下にその成立過程を追ってみたい。

トルコ人の偉大な過去を立証するというアタテュルク (1881–1938 年) の意向を受け、1930 年 4 月に「トルコ史研究委員会」（のちに「トルコ史研究協会」（以下、「協会」と表記）に改称、現在のトルコ歴史学協会の前身）が組織される。民族主義雑誌『トルコ人の母国』を主宰するユースフ・アクチュラ (1876–1935 年)、アタテュルクの養女でもあるアーフェト・イナン (1908–1985 年) ら側近 9 名がアタテュルクの庇護のもと、急ピッチで歴史書を執筆し、年内に『トルコ史概要』（以下、『概要』と表記）として出版した。同書を下敷きとして、1931–1932 年にはリセ（高等学校）用教科書『歴史』（全 4 巻）が出版される。これらに続き「協会」が 1932 年 7 月上旬にアンカラで開催したのが「第 1 回トルコ歴史学大会」（以下、「大会」と表記）である [Ersanlı 2003: 119–147; T: iii–v; 永田 2004: 146–150, 197–202]。

各セッションでは『概要』の執筆者や他の著名な学者たちが様々な報告をした。とりわけ「テーゼ」の目玉であり、トガンとも関係するのは、「トルコ海」とその乾燥化によって生じたとされるトルコ人の祖先の大移住についてである [Ersanlı 2003: 144]。上述の定義と重なるが、おおまかにまとめると以下の通りである。

『概要』や『歴史』によれば、いにしえの「トルコ海」はコーカサス山脈から天山山脈、ゴビ砂漠にまで広がっていたが、氷河期の終焉とともに水源となる氷河を失った結果、周辺地域の乾燥化と海水域面積の縮小が進んだとされる。この内海の周辺で豊かな生活を営んでいたトルコ人の祖先はより良い気候を求め、中国、インド、西アジア、エジプト、ヨーロッパへ大規模に移住して文明を築いた。とりわけ最古の文明を築いたシュメール人は紀元前 7000 年以前にメソポタミアへ移住したトルコ人であり、膠着語の性格を持つシュメール語はトルコ語とみなされた [TTAH: 58–65, 147–150; T: 24–33, 87–88]。『概要』によれば、先史時代より始まった中央アジアからの移住は、オスマン・トルコ人のアナトリア移住まで続いたという。そして間断なく漸進的に進行する乾燥化のため、中央アジアは無人の野と化した

とされる [TTAH: 70]。

「大会」で報告の口火を切ったイナンも「トルコ海」に触れている。彼女が配布した世界地図では、中央アジアの内海である「トルコ海」が現在のアラル海やバイカル湖を覆い尽くし、カスピ海北岸やアゾフ海とも接しているのが見てとれる。また、彼女は欧米の研究を消化しつつ、世界各地の文明の祖先はインド・ヨーロッパ語族ではなくトルコ人であると主張した [BTTK: 21–23, 40–41]。

「大会」に関するトガンの発言を検討する前に、「テーゼ」と「大会」の性格についてみておきたい。そもそも「大会」は、同時期に民族主義団体「トルコ人の炉辺」から改組された共和人民党の文化組織「人民の家」のアンカラ支部を会場として開催されている。初日にはアタテュルクと教育相エサト・サガイ (1874–1938 年)[(4)] が臨席していた。また『概要』執筆者の大半および「協会」会員の半数近くは国会議員やその他の政府高官であった。これらの事実に象徴されるように、「大会」の目的は、アンカラ政府の支持を背景に「テーゼ」がトルコの公定歴史学であることを確認し、その確立を聴衆に高らかと宣言することにあったといえよう。その大半を占めたのが全国各地のリセ、師範学校、中学校の教師であったことは、教育を通じて共和国全土の青少年層へ「テーゼ」を普及させようとするアンカラ政府の意図を示唆している [BTTK: xv–xxi]。

永田 [2004: 124–133] によれば、「テーゼ」の真の意図は世俗主義の原則の強調と、独立戦争でギリシャ軍から勝ち取った「母国」アナトリアでの生存権の主張とにあった。そこでギリシャ文明に対抗するべく、より古いシュメール文明が持ち出され、トルコ人と結びつけることが求められた。こうしてアナトリアに根差した新しい国民意識を創出するために、「テーゼ」はトルコ人の中央アジアからの移住を先史時代に求めたのである。

(3)「第 1 回トルコ歴史学大会」でのトガン

トガンは『歴史』刊行後に「協会」へ提出した報告書に基づき、「大会」で二度の報告をしている。以下、議事録 [BTTK] を中心に、「大会」におけるトガンの発言とその背景を見てゆきたい。

最初の報告の冒頭でトガンは、「テーゼ」で主張される中央アジアの乾燥化のうち、歴史時代のみを検討対象とすると断っている [BTTK: 168]。彼は、かつて師事した B. バルトリド (1869–1930 年) をはじめとする 19 世紀後半以来のロシア東洋学の成果（アムダリヤの河床やバルハシ湖の水位の変動など）を挙げ、一時的な乾燥化はあったものの歴史時代の中央ア

(4) [Ersanlı 2003: 140; 永田 2004: 200] は経済相、司法相を歴任したエサト・ボズクルト (1892–1943 年) とするが、彼が教育相を務めた経験はない。いっぽう、「大会」への直接の言及は見られないが、サガイの自伝には「大会」の記念写真 [BTTK: 194] が収められ、その表紙を飾っている [Sagay 2012: 101]。

ジアには持続的な乾燥化はなかったとする当時の学説を紹介した [BTTK: 168–171]。

また彼は、ビールーニーやイドリースィー、イブン・ファドラーンなどイスラム中世の地理書や旅行記をも活用している [BTTK: 169, 175, 370, 374–375]。前述のように、トガンは「大会」以前よりビールーニーの諸作品に関する研究を続けていた。さらにトガンは、その前年にイスタンブルを訪れていたスタインへビールーニーの『諸都市の座標の決定』（Fatih, Nr. 3386）を紹介したことに言及し、歴史時代には乾燥化がなかったとする自説を本人から認めてもらったと主張する [BTTK: 170, 173, 369–370]。ここでイブン・ファドラーンの『旅行記』を持ち出したことは注目に値する。永田 [2004: 150–172] によれば、『概要』執筆者たちはもっぱら 18 世紀から 20 世紀初頭にかけてのヨーロッパ東洋学者の著作に依拠していた [(5)]。いっぽう、『旅行記』の校訂本が出版されるのは 1939 年のことであり、「大会」の時点で到底「テーゼ」側が利用できる資料ではなかった。つまり、写本発見者としての利点を存分に活用した反論といえるだろう。

二度目の報告の批判点は、13 世紀以降砂中・土中に埋没したと『歴史』が説明する都市遺跡についてである。こうした遺跡は 50 以上あったとされ、オトラル、バラサグン、タラスなど 17 都市の名が挙げられた [T: 39]。トガンはこの 17 都市の遺跡が地上に現存しており、周辺の土地も湿潤かつ豊穣であることを一つずつ検討し、また「テーゼ」側による都市名の誤読二例を指摘している [BTTK: 373–375]。この反論の主な典拠は、ビールーニーと同じく「大会」以前より研究していたカーシュガリーの『テュルク諸語集成』であった。17 都市のいくつか、とくに地名の訂正のうちの一つ（Nüzket ではなく Tünkent）は、ドイツの東洋学者 C. ブロッケルマン (1868–1956 年) が編纂した同書の索引 [Brockelmann 1928] に見出すことができる（トルコ語全訳は当時まだなかった）。また後述する新聞記者との対談では、「マフムート・カーシュガリーにおける都市名」（1927 年）、「トルキスタン地理史」（4 巻）という未刊行著作を挙げ、「大会」以前より乾燥化の問題に取り組んでいたことを明かしている。

後者についてトガンは、ベルリンに滞在していた 1925 年 3 月に旧知の歴史家であったタシュケントのベクブラト・サリオグル (1882–1938 年) へ宛てた書簡でも、『トルキスタン地理小史』という題名で言及している。この著作はトルキスタンを流れる主要河川の流域を扱い、各巻 3、400 ページから成る大作であった。トガンは同稿の意義として、バルトリドらによる「身勝手な」地名の誤読を批判的に検討したことを挙げている。この書簡でトガンは地名の正しい読みとして上述の「テュンケント」にも言及しているが、それらは単なる正誤の問題ではなく、ロシアや西欧の東洋学者たちがアラビア語・ペルシャ語史料に十分に向き合っていないという強い批判にもつながっていた [Шигабдинов 2001: 12–19]。

---

(5) 前述のカウン『アジア史序説』も「テーゼ」の成立に影響を与えている [永田 2004: 164]。

このようにトガンは自身の研究に基づき、先史時代以来「継続的」、「漸進的」に続いたと「テーゼ」が主張する乾燥（化）[BTTK: 169, 173, 370, 372] が歴史時代には存在しなかったことを繰り返し主張した。トルコ人の移住の要因を中央アジアの乾燥化に求める「テーゼ」に対しトガンが重視したのは、セルジューク朝およびモンゴル帝国時代における人口密度の上昇とそれに伴って生じる牧草地不足の問題であった。彼によれば、一世代前と比較してチンギス・ハンの世代の人口は約 5 倍に増加し、モンゴル帝国時代に 200 万人のトルコ人がアナトリアに移住したという [BTTK: 174–176, 371–372]。

この理解を支えたのは文献研究ばかりではない。トガンは 1931 年にアナトリア西北部に位置するボルを訪れ、『アトスズ雑誌』に紀行文を寄せている。彼は風光明媚で知られるアバント湖に近い高原で、小屋や畑の柵などが中央アジア、とくに自身の属するバシキール人の様式と類似しているのを目撃した。中央アジアでの生活様式が有りのまま伝わっているとまで述べたこの地域のトルコ化の契機を、トガンはモンゴル軍による 13 世紀末の遠征に求めている [Valîdî 1931b: 139–140]。このような経験が「大会」での反論の遠因の一つをなしていたことは想像に難くない。

二度の報告ののち、トガンは『概要』の執筆者で、いずれも国会議員であるレシト・ガーリプ (1893–1934 年)、マクスーディー、シェムセッティン・ギュナルタイ (1883–1961 年) から痛烈な批判を受けた [BTTK: 376–400]。とくにギュナルタイによるそれは、ロシア革命以来続くトガンとイディル・ウラル派との対立が「大会」にも影を落としていたことを物語っている。ギュナルタイは、バシキール人、ウズベク人など民族別の領域自治を追求したトガンをトルコ人の文化的・言語的統一を阻む分離主義者として批判し、聴衆の熱烈な拍手を引き起こした [BTTK: 400]。Ersanlı [2003: 173] は、学問的議論に水を差したとしてギュナルタイの発言に消極的な評価を下している。しかし、この批判と聴衆の反応は明らかにトルコ人の一体性を強く志向する汎トルコ主義と結びついたものであり、無視しえない。孤立無援となったトガンは大会会期中にダーリュルフュヌーン宛ての電報で教授職辞任を表明し、間を措かずしてトルコを去った [(6)]。

---

(6) 「大会」会期中にキョプリュリュはトガンを擁護する発言をしていない。なぜ自分を助けなかったのかというトガンの問いに対し、キョプリュリュは、自分は放浪者ではないと語ったという [Baykara 1989: 23]。この逸話は、「テーゼ」の政治的意図と学問的良心とのジレンマの中で、自身の本来の母国の違いが両者の態度の決定に大きく影響したことを示唆している。

第 2 章 トガンの弁明と「大会」批判

(1) 新聞記事・『砂中都市』での弁明

議事録を除けば、トガンが自身の著作の中で「大会」での議論に触れた機会は少ない。本節では「大会」後の新聞記事や、まとまった関連著作としてはほぼ唯一のものといってよいモノグラフに基づき、彼の弁明について見てゆきたい。

イスタンブルやアンカラの新聞各紙は会期中より「大会」の経過を報じていたが、トガンはイスタンブルに戻った後、記者たちに自身の立場を説明している。その場で彼は、自身の反論は細部の問題に過ぎず、「テーゼ」そのものには反対していないと弁解した。議論が紛糾した原因としてトガンは、『歴史』刊行後に「協会」に提出した報告書を巡るトラブルと、ロシア革命期におけるマクスーディーとの政治的対立を挙げている [*Cumhuriyet*: 18/7/1932; *Vakıt*: 18/7/1932]。後日複数紙にトガンの第一報告が掲載されたが、それはトガンの擁護というよりもむしろ、「テーゼ」の確立を知らしめるかのように直後に連載されたレシト・ガーリプの報告を際立たせるものであった。トガンの主張は根拠なく「協会」に逆らったものとして退けられた [*Hâkimiyet-i Milliye*: 16/7/1932, 30/7/1932; *Vakıt*: 22/7/1932]。

7 月中にトルコを去ったトガンは、9 月下旬にウィーンへ渡った。彼は 1932–1933 年度秋学期よりウィーン大学の博士課程に在籍するが、「大会」で自身に向けられた批判への反駁のため、モノグラフ『17 の砂中都市とサドリ・マクスーディー・ベイ』（1934 年、以下『砂中都市』と表記）を著した。本書の内容は、マクスーディー、イスハキーらイディル・ウラル派との対立と、「大会」で述べた「テーゼ」への詳細な反論とに二分される。前者はトガンの思想的土台ともいうべきトルキスタン文明論へと展開しており、亡命知識人としてのトガンの側面を考察する上で興味深いが、紙幅の都合上本稿では「大会」に直接関係する箇所に絞って取り上げたい [7]。

本書でも、「テーゼ」への反論は「大会」での議論を踏襲している。冒頭では「継続的」、「漸進的」乾燥（化）は存在せず、中央アジアに暮らすトルコ人を移住へ駆り立てたのは人口密度の問題であったとする「大会」での考えが改めて表明された [Valîdî 1934: 4]。

しかし本書でより興味深いのは、「大会」会期中に突如として生じたトガンの教授職辞任を巡る経緯である。Valîdî [1934: 5–6] によれば、写本研究に必要な古代の諸言語や関連学問の習得を目的として、彼は 1931–1932 年度秋学期よりウィーン大学での聴講を開始した。この留学は自身の属するダーリュルフュヌーン文学部の許可を得てのものだったが、大学本部からは認められなかったため、トガンは半年で留学を打ち切りトルコに帰国した。大統領府

[7] トガンは本書でロシア革命以来イディル・ウラル派から様々な妨害を受けたと主張する。また、タタール人による文化的優越性の押し付け、いわゆる「タタール・ヘゲモニー」を強く批判している [Valîdî 1934: 7–34]。

への請願が認められなかったトガンは、教授職を辞してでもウィーン留学を優先させようと決心したという。そして「アンカラ会議 [「大会」] へ行く前にアパートの清算を済ませ、(略) [教育] 省には俸給維持を望み、認められない場合には辞任して 8 月初頭にヨーロッパへ行く」つもりであり、実際にそうしたと説明している。トガンの辞任は大学やアンカラで物議をかもしたが、「ヨーロッパ旅行の原因はその事件ではない」、「トルコにおける論争ではなく、ヨーロッパで自分の望むことに従事する」と述べ、教授職辞任は自発的なものであることを強調した。つまり辞任と「大会」との因果関係を明確に否定したのである。

『砂中都市』で目を引く第 2 の批判点は、マクスーディーの学問に対する態度である。前節では流砂の堆積によって地中に埋もれたと「テーゼ」が主張する都市に触れたが、トガンは『歴史』に対する報告書（および『砂中都市』）において、たとえばタラスとバラサグンを、それぞれカザフスタン南部に位置するエウリエ・アタ（のちにジャンブルへ改称）とキルギスのチュー河畔に位置するトクマクに比定した [Valîdî 1934: 35–37, 41–43, 53]。いっぽうマクスーディーは、「大会」でバルトリドの『1893–94 年中央アジア旅行報告』(1897 年、以下『旅行報告』と表記）を引用し、トガンの主張には根拠がないと批判していた [BTTK: 391–394, 396–397]。

『砂中都市』におけるトガンの主な反論は、マクスーディーによる『旅行報告』の利用が恣意的であったとする点である。たとえば、タラスに関してマクスーディーは同書を意図的に誤訳し、あるいは「テーゼ」にとって不都合な箇所を無視した。チュー河畔に位置したとされるスイヤブについても、マクスーディーはバルトリドの記述を改ざんし、同河から数百キロも離れたかのように示した、とトガンは指摘する。このようにトガンは、マクスーディーによるテキストの歪曲を批判している。一つ一つは小さな改ざんであっても、全体でみればその影響は多大であり、研究者としてあるまじき詐術だとして糾弾したのである [Valîdî 1934: 41–44, 46, 48–50]。こうしたマクスーディー批判は手厳しいものだったが、「大会」での報告と同じく、新聞記事や『砂中都市』での反論や批判も「テーゼ」の枠組みそのものからは大きく外れたものではなかった。

(2) オーレル・スタイン・ペーパーズ概要

ではこうしたトガンの弁明は、はたして彼の真意といえるだろうか。後年の代表作の一つ『トルコ全史入門』(初版 1946 年) [Togan 1981] を中心にトガンの学術的背景と歴史観を「テーゼ」と比較した N. ウズベクによれば、トガンは 1946 年の時点でも名指しでの「テーゼ」批判を避けていた [Özbek 1997: 22]。博士号を取得したのち教授としてトガンが在籍したボン

(1935–1938 年)・ゲッティンゲン (1938–1939 年) 両大学時代については、大学文書館やトルコ共和国首相府共和国文書館に資料が比較的よく残されており、[Фархшатов 1998; 2011] がロシア語に翻訳して紹介している [8]。しかし、これらの中でも「大会」に言及した資料はボン大学教授 P. カーレ (1875–1964 年) による報告 (1937 年) の一部分 [Фархшатов 1998: 59] のみであり、「大会」後におけるトガン自身の言及は前述した新聞記事や『砂中都市』を除き、ほとんど知られていなかった。以上を踏まえ、本稿では従来の研究では利用されることのなかったオーレル・スタイン・ペーパーズを中心に検討してゆく。

オックスフォード大学ボードリアン図書館が所蔵するオーレル・スタイン・ペーパーズ Aurel Stein Papers: MS. Eng. c. 2819, fols. 16–48（以下、ASP と表記）は 1991 年に発見された 33 葉から成っており、そのうち 30 葉がトガンと関係する。内訳は 1) 往復書簡 6 通 (fols. 16–32)〔トガン発スタイン宛 4 通（【書簡 1】1932 年 10 月 6 日付､【書簡 1'】別ヴァリアント ;【書簡 3】同 12 月 2 日付 ;【書簡 4】1933 年 4 月 12 日付 ;【書簡 6】同 8 月 31 日付）、スタイン発トガン宛書簡の写し 2 通（【書簡 2】1932 年 11 月 1 日付;【書簡 5】1933 年 6 月 24 日付）、英語で認められた【書簡 5】を除き、残りの 5 通はドイツ語〕、2)【書簡 6】に同封されたトガンのドイツ語未刊行論文「南ペルシャのトルコ系諸部族について」（以下、「南ペルシャ」と表記）原稿 (fols. 30–39)、3) オーストリア人東洋学者 P. ヴィッテク (1894–1978 年) がトガンを紹介した記事 [Anonym 1932] の原稿 (fols. 40–45) に大別できる [9]。

スタインの調査によって将来されたコレクションおよび書簡を含む関連文書は英国各地の大学や図書館に所蔵されているが、本資料はその網羅的ハンドブック [Wang & Perkins 2008] にも記載されていない。なおトガンが【書簡 1】に同封した写本の要約とイスラム世界諸都市の緯経度表は Ms. Stein Or. c. 18 として同館が所蔵している。

(3) 書簡における「大会」批判

トガンは「大会」と「テーゼ」に対する自身の考えを【書簡 1･3】でスタインに述べている。本節と次節では彼の考えとそのごの反響を見てゆきたい。

ウィーンに到着して 10 日後に認めた【書簡 1】の冒頭でトガンは、「大会」が自身にとって「かなり大きな厄災」であり、そのために大学を辞職してトルコを去らねばならなかったと説明している [ASP: 16]。「大会」と教授職辞任・渡欧との因果関係を否定した『砂中都市』での弁明が本心ではなかったことがここからわかる。

---

[8] 両大学の文書資料は、そのごウファで出版されたトガン関連の出版物に度々掲載されている。しかし、ファルフシャトフが取り上げたのは資料全体のうちのほんの数例であり、更なる検討を要するのは言うまでもない。

[9] MS. Eng. c. 2819, http://www.bodley.ox.ac.uk/dept/scwmss/wmss/online/single-items/guardbooks/engc2819.html, アクセス日：2013 年 12 月 26 日。

前述した同封物の説明を一通り終えたのち、トガンはスタインに「大会」の様子を述べてゆく。国会議員や「協会」会員、すなわち『歴史』の執筆者たちが「トルキスタンにおける歴史的事件を、今まで止むことなく進行している土地の乾燥 [化] によって説明し」た「テーゼ」は、フン、セルジューク、モンゴル ([ASP: 20] ではオスマン) など、中央アジア諸民族の移住の要因を乾燥化に求めたと、トガンは説明する。彼によれば、「テーゼ」は「民族主義的見解に最も適合」し、さらに「将来の不安定な？ [原文ママ]」トルキスタンのトルコ系住民にトルコ共和国への移住を促し、自国におけるトルコ人の比率を高めようとする政治的な意図を有していた [ASP: 17]。永田 [2004] とは視点がやや異なるが、トガンも「テーゼ」の目的がアナトリアに根差した国民意識の深化にあったことを見抜いていたといえよう。【書簡 1】での主な批判対象は、「大会」報告でスタインの著作を頻繁に引用したレシト・ガーリプである。しかし「彼らは貴兄のトランスクリプションをも正しく読むことができず、レシト・ガーリプによる貴兄の東トルコ語の地名の引用は常に誤ったものでした」[ASP: 18] という説明は、『砂中都市』での執拗なマクスーディー批判と比べるとかなり素っ気なく、端から論争の相手としていない印象を受ける。

続く【書簡 3】では、批判の矛先が「テーゼ」の背後に控えるアンカラ政府自体に向けられた。「大会」でトガンは、オスマン史の枠組みを超えた新しいトルコ史研究に道を開いたとしてその開催を曲がりなりにも評価していた [BTTK: 176]。しかし【書簡 3】では、「小生としましては、アンカラ歴史会議での事件に関して一片たりとも同情の気持ちを抱く理由などございません」[ASP: 23b] と取り付く島もない態度を見せている。

とくにトガンが問題視したのは、トルコにおける教育・研究環境であった。「大会」直後より、ダーリュルフュヌーン改革（翌年 8 月イスタンブル大学に改組）と並行して首都アンカラでの大学設置の試みが着手されているが、トガンは「架空のアンカラ『ケマリスト大学』」は実現の可能性がない、とアンカラ政府を強く批判した [(10)]。彼の考えでは、政府はダーリュルフュヌーンを敵視するばかりでなく、「大学内外での自由な学問」の敵でもあった。さらに政府が自国の研究者を信用しないばかりでなく、外国人研究者にも敵意を示していると指摘した。大学教授の職務として当然トガンは教育活動にも従事したが、文学部の学生はごく少数であり、自身の後継者を養成しえなかったと振り返っている。トガンはその背景を、トルコの中等教育で東西の諸言語が十分に教えられていないことに求めた。こうした「思想の自由と学術活動への敬意も普及していない」トルコの閉塞的状況を、トガンは端的に「軍人精神が支配的」であるとスタインに語っている。さらに継続的活動の環境としては中央アジア

(10) これは文学部に相当する言語・歴史 - 地理学部（DTCF）を指すと思われる。DTCF は 1935 年に単独の高等教育機関として設置され、1946 年に他の高等教育機関とともにアンカラ大学へ編入・改組された [Dölen 2010: 204–212]。

の方がより望ましいとまで述べ、トルコ共和国に何の未練もないことを明かしている [ASP: 24a]。

とはいえ、彼は「大会」についてただ悲観的だったわけではない。同書簡では「学術的信念の強さ」を示し、自国の教養人のみならず、ヨーロッパの研究者たちにトルコにおける「自主独立の学問の存在」を示せたという前向きな自己評価を下している [ASP: 24a]。

(4) ヨーロッパの東洋学者たちの反応

いっぽう、スタインらヨーロッパの東洋学者たちもトガンの訴えによく応えた。【書簡3】でトガンは、19 世紀末から 20 世紀半ばにかけて活躍した東洋学者たち（P. ヴィッテク、C. ブロッケルマン、V. クリスティアン (1885–1963 年)、W. バング・カウプ (1869–1934 年)、H. ベッカー (1876–1933 年)、R. ハルトマン (1881–1965 年)、N. ジュラ (1890–1976 年)、Th. メンツェル (1878–1939 年)、M. シャーデ (1883–1947 年)、Fr. テシュナー (1888–1967 年)、H. ヤンスキー (1898–1981 年)）から物質的支援を受けたことを明かしている [ASP: 24b]。

こうした支援には「テーゼ」批判やトガンの擁護も含まれる。リヒャルト・ハルトマンによる批評は、ヨーロッパの東洋学者たちが呆れつつ「テーゼ」を眺めていたことをうかがわせる好例だろう。トガンが「アンカラの理論に対する非常に注目すべき論文」[ASP: 24b] (11) と述べた記事、すなわちユースフ・ズィヤ・オゼル (1870–1947 年) 著『アーリア人とトゥラン人』（1932 年）に対するハルトマンの書評も手厳しいものであった。

永田 [2004: 147] によれば、オゼルは地中海に最初の文明をもたらしたのはトルコ人であると着想した人物である。したがってオゼルは「テーゼ」の骨格を築いた最重要人物といえるが、ハルトマンはオゼルのこじ付けを強く批判する。同書ではアナトリア・トルコ語がギリシャ語・ラテン語の祖語として位置付けられ、数多くの単語や神格化の概念などがトルコ語の産物とされた。しかし、ハルトマンは言語学的知識と緻密な実証を欠くオゼルの手法に学術的価値を認めていない。さらに彼はオゼルの主張が「常に客観的に説明されるズィヤ・ギョカルプのナショナリズム」、すなわちアナトリア第一の「共和国トルコ主義」からかけ離れたものであると指摘する [Hartmann 1932: 2031]。永田 [2004: 148] は、ギリシャ文明に先行する「トルコ文明」によってアナトリアでの生存権を防衛しようとするテーゼの発想はトルコ人の間に早くから生まれ、オゼルはそうした機運を捉えたに過ぎない、として一定の理解を示したが、ハルトマンは「ドグマとしての空想」以上のものを見出さなかった [Hartmann 1932: 2031]。ハルトマンは同書をもってトルコにおける研究水準の低下を危惧するが、同時に良心的で優れたトルコ人研究者たちによる発展を期待している。もちろんトガ

(11) トガンはこの直後に、ショービニズムが学問に敵対する事態をアタテュルクがキョプリュリュを通じて退けさせたとするハルトマンの記述に言及しているが、残念ながら該当する論文を特定できなかった。

ンもその一人として想定されていただろう [Hartmann 1932: 2031–2032]。

イスタンブルのドイツ考古学研究所に在籍し、トガンと親交を結んでいたパウル・ヴィッテクは、トガンのウィーン到着から時を措かずして『イスラム世界』誌にトガンを紹介する記事を寄稿し、アタテュルクの「テーゼ」への関与を婉曲に批判した [Anonym 1932: 25]。いっぽうその原稿 [ASP: 44] では、「歴史の歪曲というショービニスト的な試み」、「アンカラのむちゃな要求」にトガンが「道徳的抵抗」を示している、という同誌にはない直接的な表現が見られる。さらに原稿では執筆者としてヴィッテクの署名が付されたが、刊行時には匿名の記事として掲載された。こうしたヴィッテク側の憚りは、トガンが書簡で指摘したような、ヨーロッパの東洋学者たちとアンカラ政府との間の緊張関係をうかがわせる。

むろんスタインも物心両面でトガンを支援した。トガンはスタインからの寄付金を学費に充てることを報告している [ASP: 22b–23a, 25a]。スタインは【書簡 2】で、「大会」でトガンが「テーゼ」主唱者から執拗に批判されたことに同情し、またトガンによるスタインへの言及が正当であったことを認めた。「テーゼ」側のトガン批判が「貴兄よりもイスタンブル大学の声望を害した」と述べたように、スタインもまた「テーゼ」の背後を見抜いていた [ASP: 22b]。

以上のように書簡群からは、「大会」に関して『砂中都市』とは全く異なる考えをトガンが抱き、スタインらヨーロッパの東洋学者たちも「テーゼ」に反発し、トガンを擁護したことがわかる。別の書簡でスタインはトガンについて「トルコ民族主義のバイアスがイスタンブル大学の講壇から追放した」[British Library, Ms. Or. 13114, fol. 213] と述べているが、この言葉はトガンが「テーゼ」を追求するアンカラ政府の犠牲となったことをよく表現している [(12)]。

第 3 章　イラン・インド史への接近

(1) 写本研究の出版に向けて

前章では「テーゼ」とトガンとの乖離を確認したが、トルコ史研究におけるトガンの独自性はどのようなものであったろうか。本章では ASP のもう一つの主題であるイラン・インド史への接近を取り上げ、非トルコ的地域の中にトルコ的要素を見出そうとした彼の試みを考察してゆく。

---

(12) ただし、このことは必ずしも論敵の勝利を意味しない。レシト・ガーリプは「大会」後教育相となるが、アタテュルクらとの関係が悪化し翌年には辞任に追い込まれた。同様にマクスーディーもアタテュルクの言語政策に反発し、ラジオで批判された。第二次世界大戦後トルコが一党独裁から多党制に移行すると、マクスーディーは民主党に加入した [Ersanlı 2003: 174]。

結論を先取りすることになるが、内容から判断すると書簡群や同封物 Ms. Stein Or. c. 18 は、『ビールーニーの世界図』(初版 1937 年、以下『世界図』と表記)[Togan 1999b] として結実した写本研究の一部を成している。まず同書の序文からその出版経緯を確認したい。1925 年のトルコ帰化以来、トガンがビールーニーによる諸作品の写本を研究してきたことは第 1 章でも触れた [Köprülüzade 1926]。『世界図』序文によれば、トガンは研究成果を 1928 年にアラビア文字トルコ語でまとめ、校正刷りにまで進捗していた。しかし、アンカラ政府がこの年の 11 月にラテン文字採用を決定したため、出版は頓挫してしまった。翌年トガンはバルトリドの仲介によってソ連科学アカデミーからロシア語で出版しようとしたが、1930 年にバルトリドが死去したためこの試みも失敗したという。結局この著作はアラビア語テキストに英語の序文を付す形で、スタインの口添えによってインド考古調査局から出版された [Togan 1999b: ii]。

敵視していたはずのソ連での出版をトガンが見込んだ背景には、マシュハドで発見した写本に関する論文が亡命間もない 1924 年に科学アカデミー紀要に掲載された点、またバルトリドとの関係が亡命以降も続いた点にあると思われる。たとえば 1925 年 4 月にバルトリドに宛てた書簡では、亡命以前におけるザラフシャン河流域やホラズム地方での民族誌学的観察を語っていた [Салихов 2001: 158–161]。

しかし仮にバルトリドが健在であったとしても、ソ連での出版が実現したかは疑わしい。その原因として、ベルリン亡命中のトガンが「世界左派社会主義者会議」(1924 年末) に TMB 社会主義会派の代表として参加したことが挙げられる。この会議でトガンは、帝政ロシア／ボリシェビキによるロシア・ショービニズムやトルキスタンでの経済的収奪を激しく批判した [Валиди 1925: 16–18; Togan 1999a: 483–484]。Togan [1999a: 497] によれば、アカデミー紀要に掲載された論文はロシアの東洋学者たちからも歓迎され、彼らとの文通や更なる論文の投稿にも障害はなかったという。しかし、問題の演説がベルリンの左派エスエルの機関誌に掲載されると状況は一変し、バルトリド以外との関係は断絶してしまった。

トガンの抱いたロシア人への根深い不信も無視しえない。帰化間もない 1925 年 7 月、旧友の東洋学者 A. サモイロヴィッチ (1880–1938 年) がロシアからトルコを訪れ、アンカラでトガンと面会した。トガンは『回想録』で、サモイロヴィッチを警戒し、冷淡な態度を取ったと述懐している。そして、学術的問題においてもロシア人の優越性やロシア化をトルコ人に押し付けようとする大ロシア主義的態度が本人に見られるとして、面と向かってサモイロヴィッチを詰った [Togan 1999a: 524–526]。

このように、バルトリドを除きロシア東洋学界との関係を悪化させたトガンが、第三の方策としてドイツ語による出版を着想したのは自然な成り行きであった。『世界図』ではドイツ語出版への具体的な言及は見られないが、トガンはすでに【書簡 1】で『諸都市の

座標の決定』や『マスウード典範』（Beyazıt, Veliyüddin, Nr. 2277 底本 ; Askeri Müze, Nr. 87; Süleymaniye, Carullah, Nr. 1498; Kandilli Rasathanesi, Nr. 364; Staatsbibliothek zu Berlin, Ms. or. quart. 1613; Konya, Yusuf Ağa, Nr. 6625、番号は現在のもの）に基づき、イスラム世界諸都市の緯経度表をヨーロッパの言語で出版したい、とスタインに打ち明けている [ASP: 16]。

留学開始より半年が経過した【書簡 4】では、出版計画が順調に進んでいることをスタインに報告している。緯経度表のテキスト・翻訳および注釈は『ウィーン東洋学雑誌』に、またドイツ考古学研究所の『イスタンブル報告集』にも関連する論文が掲載される予定であった [ASP: 25a–26]。後述のようにこれらの論文は刊行されなかったが、それぞれ 80、100 ページ近くはあったようである。トガンは写本中に見られるインドの地名についてスタインの助力を必要とした [ASP: 26]。

(2) インド・カシミール史への関心

【書簡 4･5】でのトガンの質問とそれに対するスタインの回答は、トガンがトルコ史を隣接する地域や研究領域とどのように結び付けようとしたかを示している。質問は全部で 4 つあるが、本稿ではとりわけ重点的に述べられる 2 つ [ASP: 25b] を検討したい。

トガンはビールーニーが『インド誌』、『薬学の書』(Bursa, Kurşunlu, Nr. 149)、『宝石の書』(Kayseri, Raşit Efendi, Nr. 596) で言及する Bahtawariyan をトルコ人とみなし、彼らについての情報や研究の有無をスタインに尋ねている。トガンはこの集団をトルコ系とする根拠として、ドイツ人東洋学者 E. ザッハウ (1845–1930 年) の校訂・英訳による『アルベールーニーのインド誌』（初版 1887–1888 年）に出てくる地名 Schltas をトルコ語の「ヤシルタシュ（黄色い石）」ではないかと推測していた。トガンの質問は『インド誌』[Sachau 1910: 178]、『薬学の書』で言及されるカシミール王 Muttay に及んだ。後者によれば、カシミールのトルコ人の間ではこの王にまつわる叙事詩が有名であったという。そして恐らく音の類似から、トガンはこの人物をサカ王マータヴァ Mathava に比定した。

第 1 章でも述べたように、トガンはトルコ民族に伝わる一連の英雄叙事詩を民族史の指標として重視していた。現在の一般的な理解においてイラン系とされるサカをトルコ系と見なすのは奇異に思われるかもしれない。しかしトガンは『アトスズ雑誌』において、叙事詩に伝わるトルコ人の英雄アルプ・エル・トゥンガを、コーカサスからオリエント世界に侵入したスキタイの王マデュエス（『歴史』1 巻 103 節、トルコ語：マドゥヴァ Maduva）としてヘロドトスが記したサカ族の王に比定している。さらに、紀元前 625 年にメディア王キュアクサレス (在：紀元前 625–585 年) の計略によって殺されたこの王の死（同 106 節）をもって、『王書』がトゥランの王として伝え、『テュルク諸語集成』がその挽歌を収める英雄アフラースィーヤーブと同一視したのである [Valîdî 1931a: 52, 100, 102; 林 2007:

92–94][13]。アフラースィーヤーブは [Brockelmann 1928: 240, 250] ですでにアルプ・エル・トゥンガと同一視されていたが、さらにトガンは前述のサリオグル宛て書簡のなかで、この英雄が 8 世紀頃のモンゴルやウイグルでは「トゥンガ・テキン」の名で知られ、その礼拝儀式は『王書』の英雄スィヤーウシュに捧げられたゾロアスター教徒のそれと関係したと語っている [Шигабдинов 2001: 27–28]。

二点目は、7 世紀以降アフガニスタン東部および南部を支配したカーブル・シャーヒ朝 [Wink 1990: 112–115, 119–122, 125] の始祖伝説についてである。トガンによれば、『インド誌』と『宝石の書』とでは細部に差があるものの、トルコ人とされる建国者の伝説はカーブル近郊の洞窟を舞台としていた。トガンは [Stein 1893] に依拠し、「シャー - ブラフマン」とされるトルコ系の支配者についてスタインに教えを乞うている。当時ウィーンの図書館には、12 世紀カシミールの歴史家カルハナが著し、スタインが翻訳した年代記『カルハナのラージャタランギニー』[Stein 1900] がなかったためである。

【書簡 5】でのスタインの回答によれば、Bahtawariyan は正しくは Bhattavaryan であり、Schltas は Shiltas（ギルギット以南に位置し、スタイン自身も踏査したチラース）であった [ASP: 27]。スタインは他にも正しい地名の読み方を記しているが、これらはトガンの誤読というより、ビールーニーら中世イスラム地理学者たちの誤認に基づくものと思われる。Khān [1976: 99–101] によれば、ビールーニーは実際にはチベット系の人々である Bhattavaryan をトルコ系と混同していた。東部イランおよびインドとの境域に暮らす非トルコ系集団をトルコ系と混同してしまう例は他の地理書にも見られるものであった [Wink 1990: 115–116, 234]。

スタインの解説は Muttay へと移る。スタインはこの人物が『唐書』における Mu-To-Pi、すなわち自身の『ラージャタランギニー』に幾度も登場する 8 世紀前半のカシミール王ラリターディトヤ・ムクターピーダ (在 : 724–760 年頃)[Khān 1976: 101; Wink 1990: 242–243] だとした。Mu-To-Pi は『新唐書』巻 221 下西域下「箇失蜜」条において言及される「木多筆」王を指す [新唐書 : 6255–6256]。【書簡 5】での説明の仕方から判断すると、スタインが参照したのは É. シャヴァンヌ (1865–1918 年) の『西突厥史料』（1903 年）に間違いない。のみならずスタインは英領インドで発表された英訳『インド誌』への書評をも参照し、ムクターピーダのアラビア文字音写の変化（Muttāpir [Bühler 1890: 382]/Muttapir [Stein 1900: 131–132] から Muttāy /Muttay へ）を説明した [ASP: 27]。トガンも漢文史料の重要性は認識していたが、たとえばトルコ民族のシンボルに関する論文 [Valîdî 1925] で柔然や突厥に言及する際には、19 世紀前半のロシアの中国学者イアキーンフ (ビチューリン、1777–1853 年) の訳に依拠しているだけであり、古臭さは否めない。厳密な史料批判に加え、多様な文献から総合的にカ

(13) マデュエスをトルコ人の英雄と見なすのはトガンのみではない。すでに 18 世紀半ばのイギリスで出版された『普遍史』は、マデュエスをトルコ人とタルタル人の王オグス・ハーンに比定している [Sale 1748: 45–46]。

シミール史に迫るという点では、スタインはトガンの及ばない範囲までを捉えていたといえる。

続けてスタインは、「トルコ系のカーブル・シャーヒーヤ」についてはこれまで全く研究に従事していなかったと断っている [ASP: 27]。トガンが参照したスタインの論文はたしかに前半でトルコ的要素にも若干言及しているが、主にスタインが論じた「シャー - ブラフマン」はブラフマン出身の大臣が興した後継国家ヒンドゥー・シャーヒ朝期に属していた [Stein 1893: 198–200; Wink 1990: 125–127]。

このようにトガンがインド・カシミール史にもトルコ的要素を見出そうとしていたことがわかるが、スタインの回答を見る限り、トガンの質問はやや勇み足であり、また一部では拡大解釈に基づいていたと認めざるをえない。

(3) イラン史への関心

本稿が扱う文通の時期（1932 年 10 月 –1933 年 10 月）において、スタインはイラン南部ファールス地方を主な対象とする第 2・3 次イラン発掘調査に従事していた。とくに第 2 次調査では、1933 年初頭にペルシャ湾沿岸部から内陸部へ進もうとしたが、近隣のトルクメン系部族 (14) による反乱のため調査の中断を余儀なくされている [ASP: 28; Stein 1934: 131–133]。一連の経緯に触発されたトガンはこの地方のトルコ系諸部族について【書簡 4・6】で問題を提起し、さらに論文の原稿をスタインに送った。

トガンは【書簡 4】で、ファールス州に接するフーゼスターン州東部のビフビハーン（現代ペルシャ語の発音ではベフバハーン）に暮らす遊牧民アカチェリ（ペルシャ語：アーガージャーリー）を重視している。「アカチェリはペルシャに定住した最古のトルコ系部族」であり、さらにドイツ人考古学者 E. ヘルツフェルト (1879–1948 年) の『パイクリ』（1924 年）にさえもアカチェリへの言及があると述べる [ASP: 26]。ヘルツフェルトは、ササン朝第 7 代シャー・ナルセ 1 世（在 : 293–302 年）の事績を刻んだパイクリ碑文のある字句を「アク・アカテラーンのハーカーン」と読み、さらにトルコ語の音韻変化から「白ハザル人たちの支配者」と解釈していた [Herzfeld 1924: 103, 133–134]。

【書簡 6】に同封された未刊行論文「南ペルシャ」は、19 世紀から 20 世紀初頭にかけての地誌、旅行記、研究書などを参考に、支族、テント数、名称の由来、関連する歴史的事件などを、「バハルル」、「カシュガイ」、「イナルル」、「ビフビハーンのアカチェリ」の 4 部族ごとにまとめたものである。トガンは彼らの支族名にトルコ・モンゴル的伝統の要素を見出し、「大会」や『アトスズ雑誌』での主張と同様に、一部の例外を除きこれらの部族がセルジューク朝・モンゴ

(14) スタインが言及した「タラクマ」はトルクメン人のアラビア語複数形に由来する。トガンはこの部族をバハルルの一部と推測した [ASP: 31]。

ル帝国期にイランに定着したと考えた [ASP: 31, 34, 36–37]。

しかし【書簡 4】と同様、「南ペルシャ」でトガンが最も注意を払ったのは、11 世紀以前にこの地に移住したとするアカチェリである。彼の言を借りれば、アカチェリは「イランおよび西アジア全般における最古のトルコ系部族」であった。トガンはヘロドトスもアカチェリに言及しているというが、これはスキタイの隣人としてトランシルヴァニアに割拠していた遊牧民・アガテュルソイ人を指す（『歴史』4 巻 48, 78, 100, 102 節など）。また、パイクリ碑文にも再び触れアカチェリの古さを強調した [ASP: 38]。

続けてトガンは、ビフバハーンの都市を創建したのはティムールであり、その命令で遊牧民が移住させられたと説明する [ASP: 38]。トガンがアカチェリを重視したのは、この逸話が自身の調査したミニアチュール絵画と合致すると考えたためでもあった。【書簡 6】で彼は、「イスタンブルの宮廷 [トプカプ宮殿] 図書館にはビフベハーン住人のミニアチュール写本が存在しますが、ミニアチュールの、とりわけ自然の描写は完全にトルファンの描写と同一です」と述べ、ティムールの時代に作成されたとするミニアチュールの様式、「南ペルシャ」の表現を借りれば「純粋な東トルコ様式」を高く評価するとともに、画工の出自をアカチェリと推定した [ASP: 26, 39]。

トガンのこの指摘に合致する人物は、フェルドゥースィーの『王書』、ニザーミーの『ハムサ』、他 1 点から成る写本 (Topkapı Saray Müzesi, H.1510) のうち、『王書』の奥付に名が見えるマンスール（略）アル＝ビフビハーニーという画工である [Soucek & Çağman 1995: 182–186]。しかし、同一人物による別作品 (Türk ve İslam Eserleri Müzesi, T. 1950) を分析した美術史家 M. アアオール (1896–1949 年) は、中国から受けた影響に言及しつつも、描かれたモチーフからこの人物がゾロアスター教徒である可能性を指摘した [Aga-Oglu 1936: 84–85, 96–98]。この画工に関する情報は乏しく、その信仰からすぐさまイラン系と判断することは避けたいが、文献研究のアプローチ、つまりニスバのみをもってアカチェリに結び付けようとしたトガンは早計であったと認めざるをえない。トガンは自身の推定を撤回したと思われ、のちにこれらの写本を紹介した際にはマンスール・ビフビハーニーの出自への言及を避けている [Togan 1963: 24, 49][15]。

以上の質問からもわかるように、トガンはイラン史を決してペルシャ人によって専有される歴史として見ていなかった。インドにもトルコ的要素を求めたトガンにとって、イランは

(15) ムザッファル朝治下のシーラーズで作成され、ティムール朝、サファヴィー朝を経て、イスタンブルに伝わったこの写本の数奇な変遷をトガンは十分に考慮していないように思われる。Soucek & Çağman [1995: 182, 193, 201–202] は、もともとミニアチュールが描かれていなかった『王書』に加筆が施されたと推定している。それによれば、ムザッファル朝様式を薄めるため、奥付の作成年が書き換えられ、後に追加された 2 点を除くミニアチュール 21 点全てがフサイン・バイカラの時代に描き加えられたという。

当然トルコ史の舞台になりえたのである。アカチェリはモンゴル時代にアナトリア南部やイラン北西部のハルハールにも展開していたという指摘からも、トガンがシベリア・新疆からアナトリア・バルカン半島にまで広がる、いわゆる「トルコ世界 Türk Dünyası」の結節点としてイランを眺めていたことがうかがえる [ASP: 26, 38]。とくにアカチェリに古さと独自性を見出そうとしたのは、アナトリアに対して「テーゼ」がそうであったように、イランにおけるトルコ人の生存権を主張するために恰好の存在だったためだろう。

おわりに

本稿では APS を手がかりとして、「大会」以降のトガンの言動や関心を考察してきた。それらをまとめるならば、1) 議事録や『砂中都市』などでの表向きの態度とは異なり、トガンは「大会」および「テーゼ」に対して非常に批判的であり、スタインらヨーロッパ東洋学者も彼を擁護したこと、2)「テーゼ」とは全く異なる視点からトルコ史を構築するため、インド・イラン史にトルコ的要素を求めたことの 2 点に集約できよう。

とはいえ現在の研究水準 (16) からいえば、歴史時代における中央アジアの乾燥化を一時的なものに過ぎないとするトガンの主張は長期的スパンの一般論としては苦しいものに感じられる (17)。むしろ彼の議論は、数年から数十年にかけて見られる「気候の振動」と呼ばれる現象に属しているといってよいだろう (18)。よって、厳しい気候のなか文明の営みを可能とした灌漑制度に更なる注意が向けられるはずだが、トガンもマクスーディーもバルトリドの『旅行報告』に終始するのみで、同じ著者の代表作『トルキスタン灌漑史』(1914 年) には全く触れていない。サリオグル宛ての書簡で重要な先行研究として同書を挙げ、さらに第 1 章で触れた『新トルキスタン』誌においては、穀物の確保と綿花モノカルチャーからの脱却を実現する手段の一つとしてシルダリヤの支流だった旧ヤンギダリヤ（ジャナダリヤ）(19) の再

(16) 総合地球環境学研究所・イリプロジェクト (2007–2011 年度) に代表される近年の研究では、氷河のアイスコアや湖底堆積物などのサンプリングによって、過去 1,000 年にわたる気候や湖水の変動が復元されている。それによって、11–15 世紀までの中央ユーラシアは温暖・乾燥の気候であったが、15/16–19 世紀には寒冷・湿潤の小氷期を経験したことが明らかになった [窪田 2012: 456–457; 奈良間 2012a: 286–296, 306–309; 2012b: 35; 坂井 2012: 157–161]。

(17) 同時期の日本人研究者と比較すると、松田壽男 (1903–1982 年) と小林元 (1904–1963 年) は「大会」より 6 年後の 1938 年に出版した概説書において、中央アジアと西アジアを「乾燥アジア」と呼称している。そのごこの地域概念が定着したとは言い難いが、乾燥を手掛かりとして「漢文アジア史」を超えたアジア史を構築しようとする著者の意気込みを見て取ることができる [松田・小林 1941: 236–241]。

(18) 佐野 [2012: 141–143] によれば、18 世紀前半の中央ユーラシアは急激な温暖化の直後に寒冷化を迎えている。

(19) クズルオルダ近郊でシルダリヤから分岐し、アラル海に注いだ河床。16–17 世紀以降干上がってゆき、1816–

灌漑を主張したように、トガンは決して灌漑問題に無関心だったわけではない [Valîdî 1927: 16–18; Шигабдинов 2001: 13]。しかし、少なくとも「大会」や『砂中都市』において同書への言及がなかったことは、トガンを含む論争の当事者たちが「テーゼ」の枠組みの中でどれほど乾燥化の問題を真剣に議論したのか、再考を促すものである。

第 3 章ではトガンによるスタインへの質問などから彼の関心を探っていった。書簡や「南ペルシャ」からは、トガンがヨーロッパ東洋学の様々な成果を取り入れていることがうかがえるが、史料・先行研究に対し盲目的であった面は否めない。たとえば、パイクリ碑文における「アク・アカテラーンのハーカーン」という読みは、のちにドイツのイラン学者 W. ヘニング (1908–1967 年) によって退けられ、現在のイラクにあったと推測される地名「ニーカートール・アーワーナーの宿駅」へと読み改められている [Henning 1952: 507–509, 516–522]。ムクターピーダやミニアチュールの例もそうだが、トガンは地域や分野を問わず関心を広げた分、それを専門とする研究者と比較すると厳密な史料批判・分析の能力を欠いていた。

さらに、『砂中都市』で執拗に批判したはずのマクスーディーの詐術をトガン自身も犯したのではないかという点にも注意すべきである。カーブル・シャーヒ朝の始祖伝説についてトガンは、「カーブル付近の洞穴の名前をザッハウは “Kar” と読んでいますが、小生にはアラビア語名を bqr, alan bqr, alaz bqr と様々に読みえます」とスタインに述べている [ASP: 25b]。しかし Sachau [1910: 10, 361] は『インド誌』の訳文・注で保留付きながらもこの洞穴を “Var” と読んでいる。微細とはいえトガンが意図的に誤読した事実は、支援を引き出すためスタインに対して自身をよりアピールしようとしたこと、突き詰めれば、ダーリュルフュヌーン教授職の辞任は本人が望みも予期もしなかった出来事であったことを示唆している [(20)]。

以上のように、トガンの歴史研究への態度や研究手法の水準を批判的に検討しなければならない側面もたしかにあるが、全体を通じて ASP の有する意義を考えてみたい。端的にいえば、それは【書簡 1'】に見える「かつて不本意に失ったものを今取り戻さねばならない」というトガンの決意に最もよく表れている [ASP: 21]。第 3 章 (1) で紹介したバルトリド宛て書簡にある同様の表現から、「かつて失ったもの」とはロシア革命以来の混乱のため断念した研究活動への従事やそれを可能とする高等教育の継続を指すと思われる [Салихов 2001: 159]。

むろんトルコにおいてもトガンは重要な研究に取り組んでいたし、それが書簡群の背景を

1817 年にダムによって流れが完全に閉じた [Valîdî 1927: 17; ボロフカ 2012: 212, 220, 222]。

(20) 書簡群でトガンは、博士号取得後に就くべき学術ポストについてスタインらに何度も助力を求めている。このことも、トガンが熟考の暇もなく教授職辞任に追い込まれたことを想起させる。

なしていることは本稿でも述べた。しかし第 2 章で見たように、「テーゼ」が主張した先史時代の「トルコ海」とその乾燥化に伴うトルコ人の移住は、古典文献学や中近世の写本に立脚するトガンの研究にとって全くの問題外であった。さらに学術環境をとりまく息苦しさのため、トガンはトルコ共和国に見切りをつけていた。

トガンの研究手法に視点を転じると、ヴィッテクは「彼には西洋科学の規則的な系統だった方法論が欠けている」[ASP: 44] と評したが、【書簡 1・1'】でヨーロッパの研究手法やドイツ語あるいは英語の習得を課題として挙げているように、トガンも自身に不足しているものをよく理解していた [APS: 18, 21]。もともとトガンはカザン大学で学んでいた 1914 年にはすでにヨーロッパでの研究を志していたが、第一次世界大戦の勃発により断念したという事情も考慮せねばならないだろう [Togan 1999a: 103]。

したがって、トガンはトルコを去ってウィーンでの留学を本格的に始めたことによって、ようやくアンカラ政府のしがらみから解放され、ロシア革命から数えれば 15 年ぶり、また第一次世界大戦勃発からは 18 年ぶりに、研究者として真っ当な再出発を果せたと指摘できる [(21)]。その差し当たりの成果として【書簡 3】に見られたスタインへの質問は、トガンの模索するトルコ史が「テーゼ」とは異なりアナトリアに重心を置いていないことを示している。同時に、トルコ史を一つの総体として捉える彼の関心は中央アジアに限定されるものでもなく、隣接するインド・イランとの関係にも向けられていた。その指標となったのは叙事詩や古代・中世の様々な文献資料、とくにビールーニーの諸作品である。トガンは後に自身の研究の集大成として『トルコ全史入門』を出版するが、同書ではトルコ人の移住の要因、叙事詩とサカの関係、アカチェリなどの問題が本稿での検討をほぼ踏襲する形で述べられている [Togan 1981: 36, 108–109, 140–149, 166–171, 258 etc]。

よってオーレル・スタイン・ペーパーズを、共和国公定史観に対抗しうる独自のトルコ史観「トルコ全史」の具体例として評価できるだろう [(22)]。稿を改めてさらに検討する必要があるが、アナトリアでも中央アジアでもない包括的なこの歴史観こそ、トガンの「東トルコ人」という（汎トルコ主義未満の）民族主義思想の根幹を形成している。

トガンはスタインの他にも書簡群で多くの東洋学者に言及しているが、そこには同じく親交を結んだ J. ドゥニ (1879–1963 年) や G. フェラン (1864–1935 年) らフランス人東洋学者 [Togan 1999a: 465–467] の名は見られない。また、パリに亡命していたアゼルバイジャン知

---

(21) 【書簡 3】によれば、トガンは突厥語、古代ウイグル語のほか、1932–1933 年秋学期にパフラヴィー語を履修しており、さらに翌学期からはソグド語にも着手する予定であった。このほかにもウィーン大学在籍中に、W. コッパース（1886–1961 年 ; 民族誌学）、A. ドプシュ（1868–1953 年 ; ヨーロッパ古代・中世経済史）、B. ガイガー（1881–1964 年 ; インド・イラン学）らの講義を聴講している [ASP: 23a; Baykara 1989: 24–25]。

(22) [Özbek 1997] も本稿とは異なるアプローチから同様の結論に達している。

識人アリーマルダン・トプチュバショフ (1862–1934 年) の個人アルシーヴをはじめとして、1930 年代にトガンが認めた書簡や関連する文書はヨーロッパ各地に残されている。従来の研究では、民族主義者・研究者としてのトガンを理解する舞台としてトルコとロシア・中央アジアが重視されてきたが、資料的観点からもヨーロッパをトガンの生涯の「第三の舞台」として位置付けることは十分に可能ではないだろうか。

ビールーニーに関する研究成果をドイツ語で出版するというトガンの試みは、ナチスの台頭 (1932 年 7 月ドイツ第一党獲得、1933 年 1 月ヒトラー内閣成立) によって頓挫してしまう。トガンは【書簡 6】で「当地 [ウィーン] でどのように大変動が起きているかをご存じでしたら [よいのですが]。ヒトラー主義はロシアにおけるロシア革命と同様にドイツに大変革をもたらしております」と述べ、ドイツ・オーストリアの東洋学界が受けた影響の具体例を挙げている [ASP: 29][23]。せっかくやって来た新天地の中欧も自身の研究活動にとって最適な地ではなくなりつつあったが、ともかくトガンはウィーン大学で博士号を取得 (1935 年) し、ボン大学、ゲッティンゲン大学で教鞭をとることになる。

1938 年にアタテュルクが没すると「テーゼ」は事実上放棄され、翌年にはリセ用教科書『歴史』の採択除外が決定した [T: iv]。障害のなくなったトガンは同年 9 月にトルコに帰国し、イスタンブル大学に復職した。しかし、国内外の情勢が錯綜する第二次世界大戦末期のトルコで引き起こされた弾圧事件「人種主義・トゥラン主義裁判事件」を通じ、アンカラ政府が再びトガンの前に立ちはだかるのである。

参考文献

未刊行資料

ASP: *Aurel Stein Papers*, Bodleian Library, MS. Eng. c. 2819, fols. 16–45.

Aurel Stein's Correspondence with Lionel Barnett, British Library, Ms. Or. 13114/2

刊行資料

小笠原弘幸 2011「トルコ共和国公定歴史学における「過去」の再構成 : 高校用教科書『歴史』(1931 年刊) の位置づけ」『東洋文化』91、289–309 頁。

窪田順平 2012「中央アジア乾燥・半乾燥地域の人と自然 ―歴史的変遷を中心に―」『日本緑化工学会誌』37(4)、455–459 頁。

坂井亜規子 2012「過去千年間の氷河変動」窪田順平監修 ; 奈良間千之編『中央ユーラシア

(23) 結果として『イスタンブル報告集』第 1 号には H. リッター (1892–1971 年) の『オリエンタリア』が掲載され、その一部としてビールーニー写本の目録が収録された。トガンは、今後の刊行はアナトリア古代史のみに限られるだろうと悲観的に述べている [ASP: 29]。

環境史 1 環境変動と人間』京都：臨川書店、153–162 頁。
佐野雅規 2012「樹木年輪の同位体分析からみる中央ユーラシアの気候変動」窪田監修；奈良間編、前掲書、137–144 頁。
永田雄三 2004「トルコにおける「公定歴史学」の成立 ―「トルコ史テーゼ」分析の一視覚―」寺内威太郎ほか『植民地主義と歴史学：そのまなざしが残したもの』東京：刀水書房、107–233 頁。
奈良間千之 2012a「中央ユーラシアの自然環境と人間 ―変動と適応の一万年史―」窪田監修；奈良間編、前掲書、267–312 頁。
――― 2012b「2.1.4 水がめの役割を担う中央アジアの氷河とその分布」帯谷知可ほか編『中央アジア　朝倉世界地理講座 5』東京：朝倉書店、24–37 頁。
林俊雄 2007『スキタイと匈奴：遊牧の文明　（興亡の世界史 2）』東京：講談社。
ニコラス・ボロフカ；窪田順平訳 2012「アラル海の歴史 ―考古学から見た気候と湖水位の変遷―」窪田監修；奈良間編、前掲書、209–239 頁。
松田壽男・小林元 1941『乾燥アジア文化史論：支那を超えて』東京：四海書房（初版 1938 年）
新唐書：『新唐書』第十册、歐陽修、宋祁撰、北京：中華書局、1975 年。
Aga-Oglu, Mehmet; Hall, B. Helen (tr.) 1936. “The Landscape Miniatures of an Anthology Manuscript of the Year 1398 A.D.,” *Ars Islamica* 3, pp. 76–98.
Andican, A. Ahat. 2003. *Cedidizm’den Bağımsızlığa Hariçte Türkistan Mücadelesi*, İstanbul: Emre Yayınları.
Anonym [Paul Wittek]. 1932. “Aḥmed Ẕekî Valîdî,” *Die Welt des Islams* 14, S. 22–25.
Baykara, Tuncer. 1989. *Zeki Velidî Togan*, Ankara: Kültür Bakanlığı.
Brockelmann, Carl. 1928. *Mitteltürkischer Wortschatz nach Maḥmūd al-Kāšγarīs Dīvān Luγāt at-Turk*, Budapest: Kőrösi Csoma-Gesellschaft.
BTTK: (İmzasız), *Birinci Türk Tarih Kongresi: Konferanslar Müzakere Zabıtları*, 2. basım, Ankara: Türk Tarih Kurumu, 2010. (1. basım: İstanbul: Maarif Vekâleti, 1932.)
Bühler, Georg. 1890. “Albêrûnî’s India,” *Indian Antiquary* 19, pp. 381–410.
Dölen, Emre. 2010. *Türkiye Üniversite Tarihi 4: İstanbul Üniversitesi 1933–1946*, İstanbul: İstanbul Bilgi Üniversitesi Yayınları.
Ersanlı, Büşra. 2003. *İktidar ve Tarih: Türkiye’de “Resmî Tarih” Tezinin Oluşumu (1929–1937)*, 3. basım, İstanbul: İletişim Yayınları. (1. basım: İstanbul: AFA yayınları, 1992.)
Hartmann, Richard. 1932. “Yusuf Ziya, Arier und Turanier,” *Deutsche Literaturzeitung* 53(43), Sp. 2029–2032.

Henning, W. B. 1952. “A Farewell to the Khagan of the Aq-Aqatārān,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 14(3), pp. 501–522.

Herzfeld, Ernst. 1924. *Paikuli: Monument and Inscription of the Early History of the Sasanian Empire*, vol. 1, Berlin: Dietrich Reimer; Ernst Vohsen.

Khān, M. S. 1976. “Al-Bīrūnī and the Political History of India,” *Oriens* 25/26, pp. 86–115.

Köprülüzade, Mehmet Fuat. 1926. “Türkiyat Sahasında Yeni Tetkikler,” *Hayat* 3, s. 3–4.

Landau, Jacob M. 1995. *Pan-Turkism: from Irredentism to Cooperation*, 2nd ed., London: C. Hurst. (1st ed.: London, 1981.)

Özbek, Nadir. 1997. “Zeki Velidi Togan ve ‘Türk Tarih Tezi’,” *Toplumsal Tarih* 45, s. 20–27.

Sachau, Edward C., 1910. *Alberuni’s India: an Account of the Religion, Philosophy, Literature, Geography, Chronology, Astronomy, Customs, Laws and Astrology of India about A.D. 1030*, English ed., vol. 2, 2nd ed., London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co. (1st.ed.: London, 1888.)

Sagay, Esat; Sagay, Eren (haz.), 2012. *“Hocam”: Maarif Vekili Esat Sagay’ın Hatıraları*, İstanbul: Yapı Kredi Yayınları.

Sale, George (et. al.). 1748. *An Universal History: from the Earliest Account of Time*, vol. 20, London: Printed for T. Osborne, in Gray’s-Inn etc.
(URL: https://archive.org/details/anuniversalhist03conggoog)

Soucek, Priscilla P.; Çağman, Filiz. 1995. “A Royal Manuscript and its Transformation: The Life History of a Book,” in George N. Atiyeh (ed.), *The Book in the Islamic World: the Written Word and Communication in the Middle East*, New York: State University Press, pp. 179–208.

Stein, Marc Aurel. 1893. “Zur Geschichte der Çâhis von Kâbul,” in Ernst Kuhn (Hrsg.), *Festgruss an Rudolf von Roth: zum Doktor-Jubiläum, 24. August 1893*, Stuttgart: W. Kohlhammer, S. 195–202. (URL: https://archive.org/details/festgrussanrudo00kuhngoog)

———(tr.). 1900. *Kalhaṇa’s Rājataraṅgiṇī: a Chronicle of the Kings of Kaśmīr*, vol. 1, Westminster: Archibald Constable & Co.

———.1934. “Archaeological Reconnaissances in Southern Persia,” *Geographical Journal* 83(2), pp. 119–134.

T: (İmzasız), *Tarih: Kemalist Eğitimin Tarih Dersleri (1931–1941)*, C. 1, 5. basım, İstanbul: Kaynak Yayınları. 2003. (1. basım: İstanbul: Devlet Matbaası, 1931.)

TTAH: (İmzasız), *Türk Tarihinin Ana Hatları: Kemalist Yönetimin Resmî Tarih Tezi*, 3. basım, İstanbul: Kaynak Yayınları. 1999. (1. basım: İstanbul: Devlet Matbaası, 1930.)

Togan, (A.) Zeki Velidi (Valîdî). 1963. *On the Miniatures in Istanbul Libraries*, İstanbul: Baha Matbaası.

———. 1981. *Umumî Türk Tarihine Giriş 1: En Eski Devirlerden 16. Asra kadar*, 3. basım, İstanbul: Enderun Kitabevi. (1. basım: İstanbul: İsmail Akgün Matbaası, 1946.)

———. 1999a. *Hâtıralar: Türkistan ve Diğer Müslüman Doğu Türklerinin Millî Varlık ve Kültür Mücadeleleri*, 2. basım, Ankara: Türkiye Diyanet Vakfı Yayınları. (1. basım: İstanbul: Tan Matbaası, 1969.)

———. (ed.). 1999b. *Bīrūnī's Picture of the World*, rep. ed., New Delhi: Archaeological Survey of India. (1st ed.: Delhi, 1937.)

Valîdî, Ahmet-Zeki (Valîdî, Ahmet Zeki) [Togan]. 1925. "Türk Efsanelerinde Millî Alametler," *Türk Yurdu* 14, s. 134–147.

———. 1927. "Türkistan İktisadiyatında «Yerli» ve «Rus» Nokta-i Nazarları ve «Aris – Semey Hattı»," *Yeni Türkistan* 4, s.15–21.

———. 1931a. "Türk Destanının Tasnifi," *Atsız Mecmua* 1, s. 4–5; 2, s. 27–30; 3, s. 51–55; 5, s. 99–103.

———. 1931b. "Seyahat Notlar – Hatıra Defterinden," *Atsız Mecmua* 6, s. 138–140.

———. 1934. *On Yedi Kumaltı Şehri ve Sadri Maksudi Bey*. İstanbul: Bürhaneddin Matbaası.

Wink, André. 1990. *Al-Hind: the Making of the Indo-Islamic World*, vol. 1, Leiden: E. J. Brill.

Валиди А. В.[sic.] 1925. Туркестан // Знамя борьбы 9–10. С. 14–18.

Исхаков С. М. 2003. Ахмед-Закки Валидов: новейшая литература и факты его политической биографии // Вопросы истории 2003(10). С.147–159.

Салихов А. Г. 2001. Научная деятельность А. Валидова в России. Уфа.

Фархшатов М. Н. 1998. Повороты судьбы Заки Валиди: немецкие архивные документы о жизнедеятельности башкирского ученого-эмигранта в Германии // Вестник Академии наук Республики Башкортостан 3(2). С. 53–62.

Шигабдинов Р. Н. (сост.); Захидий А. (пер.) 2001. Новая страница из жизни А.З. Валиди. Токио.

新聞

Cumhuriyet

Hâkimiyet-i Milliye

Vakıt

事典類・インターネット資料 (2013 年 12 月 26 日アクセス)

大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店、2002 年。

小松久男ほか編『中央ユーラシアを知る事典』東京：平凡社、2005 年。

Deutsche Biographische Enzyklopädie.

Encyclopædia Iranica, http://www.iranicaonline.org/

Neue Deutsche Biographie.

Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi, http://www.islamansiklopedisi.info/index.php

Wang, Helen; Perkins, John (eds.). 2008. *Handbook to the Collection of Sir Aurel Stein in the UK*, 2nd ed., http://www.britishmuseum.org/pdf/Stein%20Handbook%20final(3).pdf

Фархшатов М. Н. 2011. «Работать на чужбине, творя на иноземных языках, даётся мне с большим трудом…»: А.-З. Валиди во время «второй эмиграции» (По новым архивным документам) // Роднов М. И. (ред.) Река времени. 2011. Уфа. С. 83–101. http://www.oiru.org/images/stories/Library12042012/timeriver.pdf

（慶應義塾大学大学院博士後期課程）